

ホスピタリティアート・プロジェクト

ーワークショップ・展示 ～金沢市立病院における実践から～ その3

The Hospitality Art Project Workshop Report (3) : Art Practice and Exhibition at Kanazawa Municipal Hospital

三浦 賢治 MIURA Kenji
岩崎 純 IWASAKI Jun

1. はじめに

金沢市立病院と金沢美術工芸大学との連携によるホスピタリティアート・プロジェクト(略称「HAP」)は、「医療分野におけるアートの潜在的な可能性について調査研究し、実践していく取り組み」として2009(平成21)年に立ち上げられた。

平成19年、高田重男氏が金沢市立病院長(現 病院事業管理者)に就任した。高田院長は病院運営に際し、これからの医療は病気を病院で治すことのみならず、病院と地域社会が共に癒しの空間を創出する中で病気からの快復をめざしていくという方向性を打ち出した。そして病院としての独自性の観点から、金沢の美術工芸文化を背景とする地域性を生かして医療にアートの要素を取り入れることにした。金沢には美大がある。金沢美大と連携することで病院におけるアート空間創出に向けた構想は現実味を帯びてくる。

プロジェクトの構想は久世建二金沢美術工芸大学長(当時)の快諾を得、両者の連携が成立した。また金沢市立病院と金沢美術工芸大学は共通の行政の下にあり、美術文化の振興に深い理解を示す山出保金沢市長(当時)からの賛同を得、ホスピタリティアート・プロジェクト実施に向けた具体的な準備が進められた。

ホスピタルアートは欧米においては芸術表現の一分野として一般的に認知されているもので、近年日本においても作品設置型、アーティスト・美術系大

学が企画するワークショップ型、病院専属のアートディレクター配置などの形態があり、全国各地の医療施設において活発な動きがみられる。

プロジェクトの立ち上げに際して行われた高田院長(当時)による講演会の中で、ドイツにおいては病院をクランケンハウス(患者さんの家)と呼ばれることが例に挙げられ、さらに英語のホスピタル(hospital)をその原義であるホスピタリティ(hospitality「もてなし」)と読み替えることにより、HAPを病院のアートプロジェクトの枠に収まらない、病院と地域社会との協働によって病気を癒す空間を創出する場としていくという基本理念が述べられた。

金沢市立病院と金沢美術工芸大学が「ホスピタリティ(もてなし)」の精神を互いの共通理念として、病気からの快復と日々の健康を願う市民に対する「ケア」の中に創意と表現そしてコミュニケーションとしての「アート」を活かし、医療と芸術をつなぐ領域からの新しい医療活動及び芸術活動を発信していく。本プロジェクトはホスピタリティアート・プロジェクトと名付けられた。

2. 活動の経緯

プロジェクト発足にあたり、金沢市立病院では高田院長を中心とした医療スタッフ、事務局担当によるプロジェクトチームが組まれた。金沢美術工芸大学においてはホスピスにおけるアートを主とした終末期医療の研究に取り組まれてきた一般教育等横

川善正教授（現・本学名誉教授、HAP顧問）をプロジェクト座長として、美術、デザイン、工芸、ファッション、一般学科等の各科専攻から教員を募り担当が組まれた。プロジェクトの実施にあたっては、担当教員がそれぞれの分野の特性を生かした、市立病院を活動の拠点とするにふさわしい企画・実施内容を検討し、プロジェクトは始動した。

HAPは2009年の第1回企画「ロビーを彩る光のアート -生命の樹-」から、2021年現在に至るまで13年にわたり継続しており、本学の地域連携事業の中でも息の長いプロジェクトのひとつとなっている。これはHAPに対する金沢市立病院関係者と患者、周辺地域から、プロジェクトに対して継続的に共感が得られてきたことを示していると考えられる。

HAPの活動記録は市立病院と本学それぞれが管理しているが、双方が全く同じ記録を共有しているわけではなく、病院と美大それぞれにとって必要なデータを保持している状況である。本学においては、事務局のほか本稿を記す三浦と岩崎が多くの記録を共有している。

プロジェクトの基本的な概念と2009年～2011年の活動の概要については、過去にプロジェクト座長の横川善正教授（当時）が記した金沢美術工芸大学紀要No.56「ホスピタリティアート・プロジェクト-活動と視座-」で述べられているので参照されたい。また、三浦も紀要No.56、No.57において同時期の活動報告について記述しているが、2011年9月以降のHAP活動については紀要での報告はなされていない。大学の記録としては毎年発行する社会連携研究成果報告書での記述があるが、HAP全体から見ると一部未掲載の企画もある。現在も継続するプロジェクトに携わるものとして、改めて記録を整理し紀要において活動記録を残していく責務があると考えられる。

2009年～2011年の活動・企画回数のナンバリングは、美大、市立病院それぞれの解釈がある。活動の詳細について丁寧に拾い上げている点においては横川の記述が正しいと思われるが、いずれ病院側とも調整しプロジェクトに関連するすべての動きをまと

め、公式な通し番号を整える必要があると考えている。この紀要No.66では、HAP活動について次の要領で記述していく。

1. 病院の通し番号がついていない活動については実施年毎に記述する。
2. 企画の題名と概要を年毎に記し、企画の通し番号は市立病院の記録に則る。
3. 筆者が直接関わっていない活動についても把握している範囲で記していく。
4. 活動記録で記述する個人の役職・職階の記述は当時に準ずる。
5. 実施日程、参加者、写真データ等、記録資料の詳細は別途一覧にて掲載する。

3. ホスピタリティアート・プロジェクト活動記録 2011(平成23)年9月～

2011年

第8回 平成23年9月22日～10月7日

待ち時間を豊かにする椅子（ホスピタリティ・チェアーズ）

製品デザイン専攻 根来貴成講師の指導のもと、製品デザイン学生が椅子をデザインし制作、展示した。

病院を利用する人が少しでも待ち時間を快適に過ごせないかという観点から、病院の先生や患者からのアンケートやアドバイスを基に制作されたプロトタイプ18台を1階待合ホール中庭に面した大ガラス前に展示した。展示期間中に学生によるプレゼンテーション及び医師、家具メーカーによる講評会を実施した。

第9回 平成23年11月8日～12月2日

病院の水回り空間創生プロジェクト 動作検証モデル展示

患者やその周囲の人にとって使いやすい安らぎのある水回り空間（トイレ、風呂、洗面等）の創出と、患者さんの退院後の在宅生活支援にもつなげることを目的とした1分の1動作検証モデルが市立病院1階待合ホールに展示された。制作にあたっては製品

デザイン専攻 荒井利春教授を中心とする指導のもと、同専攻学部1～3年学生6名による調査・試作のほか、病院関係者、患者の協力を経て、主に以下の方針に基づき行われた。

1. 市立病院と美大でプロジェクトチームを編成し、問題点や課題を把握する。
2. 実物大の水回りモデルを1階ロビーに設置し、実際に患者等に体験してもらい、改善の方向性を検証する。
3. H24年度以降、病棟ごとに再度検証し、年次計画に合わせ順次改修する。

2012年

第10回 平成24年2月3日～10日

病院を元気にするデザイン展

視覚デザイン専攻 後藤 徹教授、寺井剛敏教授の指導のもと、視覚デザイン専攻2年生が病院に会話が生まれ、気持ちが和んだり落ち着いたり、医師も看護師も患者も笑顔になるようなコミュニケーションデザインを提案し、1階待合ホールの大ガラス前やその周辺に作品を展示した。展示期間中に公開プレゼンテーションを行った。

第11回 平成24年8月4日～5日

第1回ホスピタルギャラリー —病院が美術館になる日— 「安らぎのいろ かたち 味わい」

出品者 92名 作品点数 132点 観覧者 572名

プロジェクトの一環であるホスピタルギャラリーは、「市民がつくる安らぎの医療」をメインテーマとして、病院の待合ホールに期間限定の「美術館」を設営し、展覧会のテーマ「安らぎのいろ かたち 味わい」にふさわしい絵画、彫刻、書、手芸、工芸等の作品を市民と市立病院の患者から募り、展示するというものである。

病院の待合ホールに展示された作品群によって安らぎの空間が創出されるこの展覧会は、第1回展開催以後、患者、医療関係者、市民の共感を得、2022年3月には第10回展を迎える。アートが患者の治療と生活の質の改善を手助けし、病院が地域社会におけ

る身近な交流の場となることを目的とするこの試みは、各メディア・学術方面からも注目されることとなった。

ホスピタルギャラリーの副題を「病院が美術館になる日」と銘打ったのは横川プロジェクト座長である。横川が「真の最先端の医療はアートである。」として、「アートの中に包摂される共鳴力、コミュニケーション力、創造力が医療者の教育と患者の教育の根底を貫く。」という高田院長の病院経営の理念に共感するように¹、医療とアートは元々互いに近い存在であり、双方が持つ特質の或る要素が良い関係で結びつく現象は歴史的に見ても自然なことであったといえる。病院におけるアートを介したコミュニケーション空間の創出。病気の快復を促し、いのちを実感し、日々をよりよく生きる術としてのアートに出会う場として病院内に美術館を設置するという発想は、HAPの理念を凝縮した形で具現化するものである。そして「病院が美術館になる日」という明解なメッセージは、主催者と出品者に展覧会の主旨について共通の認識を持たせる役目を果たしたといえよう。

第1回展はまさしく手探りの中で準備が進められた。高田院長からホスピタルギャラリーの構想を告げられた企画担当の三浦は、会場の形状、展示内容、作品の種類・規格、展覧会ポスター、チラシ、DM、募集要項、作品キャプションなど、一般的な展覧会開催に関して必要とされるおよそすべての事項についての草案をつくることになった。あたかも秀吉の一夜城が如く、金曜の夕方に病院を閉めた後の数時間で1階待合ホールに本格的な壁面を立て、市民が持ち寄った130点余の作品が展示された美術館に仕立てようという試みである。このような試みは日本でも、世界でも例を見ないのではないだろうか。

自身の個展・グループ展での企画・運営の経験はあっても、多くの出品者が参加する展覧会の詳細を企画した経験はなく、展覧会開催に関する項目の多さに暫し思案した。しかし、病院はもとより横川座長、大路孝之美大事務局長（当時）のサポートや関係業者の丁寧な対応のおかげで、徐々に展覧会の輪

郭が形作られていった。会期前の事務関連作業では病院の担当事務方と三浦との間で何度も打ち合わせを行い、確認チェックを繰り返し、展覧会の細目を整えた。

展覧会前日夕方。病院を閉めると同時に会場設営業者が待合ホールに資材を搬入し、手際良く展示壁を組み立てていく。会場設計図のとおり職人の手によって次々と壁が立ち上がり、1時間半ほどで広い待合ホール全体に会場の骨組みが仕上がっていくさまは壮観である。

ホスピタルギャラリーでは光の回廊シリーズでみられるような、美大学生が準備作業の多くを担う企画とは違い、市立病院のHAPスタッフが率先して設営作業に携わる。展示パネルと展示台が設置されたところで美大の協力学生と共に作品搬入、仕分け、配置などの作業を行った。病院スタッフは主に高田院長をはじめとして事務方、医師、看護師、技官など、20名ほどで編成されていたが、普段の多忙を極める病院業務で培われたスキルが生かされた、組織的・効率的で手早い作業に感心させられた。事前の展示計画に沿ってひと通り作品の配置が済んだのを見計らい小休憩を入れ、その時間を利用して会場効果を考慮した作品の入れ替えを行った。

その作業にある程度の時間を要すると予想されたため、本学油画専攻卒業の作家であり、済生会金沢病院でアートコーディネーターを務める駒井順子氏に作業の協力を依頼していた。予想通り短時間での作品の入れ替えは難しいと感じられたが、駒井氏の協力のおかげで迷い少なく終えることができた。作品の配置が確定した後、普段から作品の扱いに慣れている美大学生が中心となって展示作業が進められ、おおよその作業が終了した。待合ホールはパネルの搬入から6時間ほどで、市民の作品で満たされた美術館に変貌を遂げた。翌朝、三浦が会場全体のチェックと微調整を行い、展覧会は無事初日を迎えた。

展覧会をとおして一つ勉強になったことがある。反省したと言い換えてもいいのかもしれない。高田院長からホスピタルギャラリーの構想を聞いたと

き、突飛な印象が先に立ち内心実現は難しいと考えた。美術表現に関わる者として、作品を制作し公に晒すからには対外的な評価を受ける、作品が売れるなど、展示までに至った労力に見合う何らかのペイオフ（報酬）があって然るべきという考えがある。その観点からすると、ホスピタルギャラリーに出品するメリットは少ない。会場となる病院は、作品の展示環境としてはイメージし難い。作品価格もつけず、アンデパンダン形式で審査もなく賞も与えられず、わずか二日間の会期では来場者数も期待できない。広報面にしても展覧会を案内する範囲は限られており、プロ、アマ問わずの展覧会というだけでは本展の主旨に賛同する市民は多くはなく、広い待合ホールを満たすほどの作品は集まらないと予想した。しかし展覧会の構想を語る高田院長には、確信の表情が見てとれた。

結果として市民から寄せられた多種多様な作品群を前にし、改めて金沢市民の持つ美術文化に対する認識の豊かさと、「患者さんが喜んでくれるなら」「出品料も無料なのにちゃんと壁に飾ってもらえて嬉しい」等、アンケートに応える出品者の純粋な気持ちに驚くと同時に、いつの間にか筆者の「美術表現のあり様」の解釈が狭いものになりつつあることに反省の念を抱いた。また、お揃いのポロシャツをスタッフ・ユニフォームにして観覧者に接する病院関係者の表情からは、通常の病院業務とは別の「やりがい」を感じられているようにも映ったのであるが、これも高田院長が意図する効果としての一側面なのであろう。

会期中は会場のあちらこちらで患者、医療関係者、出品者が交流する様子が見られ、第1回ホスピタルギャラリーは成功裏に終えることができた。メディア各方面からの反響も大きく、この後出品者数も増え、2022年3月に第10回展を迎えることになる。

第12回 平成24年9月2日～4日

光の回廊シリーズ4 〈パレード〉

ワークショップ・展示

HAP第1回企画から続く光の回廊シリーズ。夏

の終わりの日差しが市立病院待合ホール大ガラスに貼られたカラーセロファンを透過することで、色とりどりの光がロビーを照らし、患者や来院者、病院関係者の眼を楽しませている。例年6月頃に美大内で学生スタッフによる企画会議が開かれ、図案を検討し下準備にかかる。病院内での作業は初めの2日間を美大生が行い、3日目に患者、医療関係者とのワークショップによって完成させる。遊園地を舞台に楽器を鳴らして練り歩くパレードの様子を、カラーセロファンを用いてスタンドグラス風に描いた。三浦はこの年から市立病院よりホスピタリティアート・コーディネーターを拝命する。

第13回 平成24年9月28日～10月12日

待ち時間を豊かにする椅子Ⅱ

製品デザイン専攻の美大学生がデザインし、制作した椅子を展示する第2回目。プロトタイプ23台を1階待合ホール中庭に面した大ガラス前に展示し、会期中に学生によるプレゼンテーション及び病院の職員による講評会を実施した。展示期間中は作品の人気投票やアンケートも実施した。

平成24年11月9日～22日

ランドスケープ・デザイン展示

環境デザイン専攻3年演習課題として制作した、病院屋外での小公園のデザインイメージを1階待合ホール大ガラス前に展示した。

2013年

平成25年2月16日～17日

第27回日本がん看護学会学術集会におけるホスピタリティアート・ギャラリー展示

石川県立音楽堂で行われた、がん看護学会金沢大会への賛助参加として金沢市立病院でのホスピタルギャラリー同様の壁面を設置し、HAP活動の概略を紹介するパネル展示を行った。また金沢水引のワークショップや第27回記念トートバッグの企画・監修をして金沢大会ならではの特色を出した。音楽堂通路にはホスピタリティ・チェアーズ23脚を展示した。

平成25年2月16日～17日

第30回日本衛生学会学術総会シンポジウム1（市民公開）「ホスピタリティアート“医学とアートの連携による病院における安らぎ空間の創出”」

演者（発表順）

高田 重男（金沢市立病院）

横川 善正（金沢美術工芸大学）

三浦 賢治（金沢美術工芸大学）

横川由起子（金沢市立病院）

大竹 茂樹（金沢大学医薬保健研究域保健学系）

金沢美術工芸大学美大ホールにて、高田院長を座長としたシンポジウムにおいて演者による発表が行われた。会場入り口付近ではHAP紹介パネル、ホスピタリティ・チェアーズを展示したほか、過去4年間のHAP活動をまとめたプリントを配布した。

平成25年4月26日～5月6日

待ち時間を豊かにする椅子Ⅲ

待ち時間を豊かにする椅子、特別企画展

“家具の音楽 *musque d'ameublement*”

ラフォルジュルネ金沢と金沢美大のコラボレーションによる展示。石川県立音楽堂2Fカフェ・コンチェルトに色とりどりのコンセプトチェアが並んだ。

平成25年5月11日

市立病院5階西病棟水回り空間改修完成記念会

講演「在宅生活につながる病院の水回りを目指して」 ー全員参加の水回り改修デザインプロジェクトー

講師 荒井利春 金沢美術工芸大学名誉教授

平成23年度から市立病院の病棟をモデルに、トイレ、風呂等の水回り空間が使いやすく、安らぎのある空間となり、また、退院後の在宅生活につながるものとなるにはどうあるべきかについて、入院患者、家族、病院スタッフ、金沢美大学生・教員、設計関係者等の視点から検証を行った。その検証の成果を平成24年度実施の病院5階西病棟の水回り空間改修に取り入れ、水回り空間改修が完成し、記念会を開催した。

第14回 平成25年9月2日～3日

光の回廊シリーズ5 〈夏の想い〉

ワークショップ・展示

夏祭りなど夏を感じさせるイメージや、ユネスコ世界自然遺産に認定された富士山をモチーフにした図柄を3m×10mの大ガラス全体に配した。

第15回 平成25年9月21日～23日

第2回ホスピタルギャラリー ー病院が美術館になる日ー「安らぎのいろ かたち 味わい」

出品者 162名 作品点数 168点 観覧者 914名

2014年

3月 横川プロジェクト座長が金沢美大を退任する。本学名誉教授、HAP顧問として引き続きプロジェクトに参加。

第16回 平成26年8月25日～26日

光の回廊シリーズ6 〈南からの風〉

ワークショップ・展示

南国の水辺に鳥たちが集うイメージを、待ち合いホール中庭に面した大きな窓ガラスにカラーセロファンを用いて描いた。ワークショップによって完成させた。この年、岩崎 純油画専攻非常勤講師がプロジェクトに協力参加。

第17回 平成26年9月13日～15日

第3回ホスピタルギャラリー ー病院が美術館になる日ー「安らぎのいろ かたち 味わい」

出品者・作品点数 166 観覧者 1,135名

平成26年10月23日～平成28年3月30日

日本のホスピタルアートの実態調査

筆者はコーディネーターとしてHAP活動に携わる上で、ケアとアートの関係性とその在り方について知見を広める必要性を感じていた。本学奨励研究の一環として、この年度の後半に日本各地のホスピタルアートを訪問取材し関係者のからホスピタルアートについて話を伺い、医療施設におけるアート

の現状を調査した。

○訪問取材した医療施設（取材順）

聖路加国際病院（東京都）

国立成育医療研究センター（東京都）

福岡大学病院小児医療センター（福岡市）

公立昭和病院（東京都）

名古屋第一赤十字病院（名古屋市）

四国こどもとおとなの医療センター（香川・善通寺市）

野間こどもクリニック（姫路市）

2015年

第18回 平成27年8月23日～25日

光の回廊シリーズ7 〈夢の発掘〉

ワークショップ・展示

学生の企画会議では、皆がそれぞれ持ち寄ってその年の図案を検討する。シリーズ7では「夢の発掘」と題し、人それぞれが想う夢を発掘する風景を描く案が採用された。またワークショップに留学生2名も参加。留学生、学生、市民が同じ目的意識をもってプロジェクトに参加することにより、HAPは国際交流の場としての機能も有していた。この年から岩崎が油画専攻准教授としてプロジェクトに正式参加する。

第19回 平成27年10月10日～12日

第4回ホスピタルギャラリー ー病院が美術館になる日ー「安らぎのいろ かたち 味わい」

出品者・作品点数 149 観覧者 1,059名

2016年

第20回 平成28年8月21日～23日

光の回廊シリーズ8 〈夏の冒険〉

ワークショップ・展示

「夏の冒険」と題し、青いソーダ水の海を冒険する潜水艦や魚たちが楽しそうに泳ぐ様子をイメージして描いた。学生たちが考える画には、一貫して患者の目線に立った自由で開放的なイメージがある。

第21回 平成28年9月17日～19日

第5回ホスピタルギャラリー —病院が美術館になる日—「安らぎのいろ かたち 味わい」
出品者・作品点数 176 観覧者 1,304名

2017年

平成29年3月30日

新潮社より『ホスピタリティアート・プロジェクト 病院を安らぎの空間に』（高田重男・横川善正監修）出版。

第22回 平成29年8月20日～22日

光の回廊シリーズ9「くまさんの夏休み」

ワークショップ・展示

「くまさんの夏休み」は、学生メンバーが図案を検討する中で「病気療養などで旅行に行けない患者さんが、自分が大切にするぬいぐるみを代わりに旅行をさせ、写真などの思い出を届けるサービスがある。」という発言から作画イメージを膨らませたものである。絵には「楽しくて可愛い」という意味に加えて、HAPのコンセプトに相応しいメッセージが加わった。

第23回 平成29年9月16日～18日

第6回ホスピタルギャラリー —病院が美術館になる日—「安らぎのいろ かたち 味わい」

出品者・作品点数 150 観覧者 1,188名

2018年

第24回 平成30年8月19日～21日

光の回廊シリーズ10「四季のかがやき」

ワークショップ・作品展示

「四季のかがやき」と題し、金沢の移り行く四季をこの年開通した北陸新幹線かがやき号が走り抜ける様子をイメージした図案をもとに描かれた。題名「四季のかがやき」はこの年開通した北陸新幹線かがやき号と掛けている。

第25回 平成30年9月15日～17日

第7回ホスピタルギャラリー —病院が美術館にな

る日—「安らぎのいろ かたち 味わい」

出品者・作品点数 156 観覧者 1,285名

平成30年9月17日

まちなかサロン プレオープン企画

金沢市立病院健康講座「フレイル（体の老化）を予防して元気に生きよう」

市立病院による新しいプロジェクト企画として、市立病院周辺地域、主に病院がある金沢市平和町界隈の住民を対象とする、まちなかサロンの設置が決まった。まちなかサロンは、地域住民が健康な生活を送るために生活習慣や栄養、運動、医療に関する知識について考え、健康寿命を延伸し、アートワークショップをとおして地域コミュニティの活性化を図ることを目的とするものである。

平成30年9月17日、プレオープン企画として平和町ニューアルコ内まちなかサロンにて、高田重男院長による講座「フレイル（体の老化）を予防して元気に生きよう」が開かれた。37名の参加者があり、これ以上はスペースに限界であるという報告があった。これを受けてサロン実施に際して具体的な構想が検討され、市立病院医師による講座、金沢学院大学による栄養・運動講座、金沢美大によるワークショップによる企画が検討されることになった。金沢美大が担当するワークショップ実施に際しては、三浦と岩崎が過去のプロジェクトをベースに協力学学生を募る企画を提案し、病院側の承諾を得て実施計画を立てた。

平成30年11月23日～

まちなかサロン設置

平成30年10月17日

NHK総合テレビ クローズアップ現代+「世界が注目！アートの力 健康・長寿・社会が変わる」

「金沢市立病院と金沢美術工芸大学の連携によるアートの取り組み」という枠でHAPが紹介され、ワークショップ・展示、ホスピタルギャラリーの様子や高田院長のコメントなどが全国放送された。放送を視

聴し感銘を受けた高校生（受験生）が金沢美大を受験し、入学後はプロジェクトにも積極的に参加するなど、放送の効果は大きかったようである。

**平成30年12月22日 まちなかサロン
万華鏡ワークショップ**

金沢美大の街中サロンにおける第1回企画として、以前のHAP企画で好評だった万華鏡ワークショップを行った。サロンには子供から年配の方まで周辺住民が立ち寄り、万華鏡制作を楽しんだ。

2019年

**平成31年1月26日 まちなかサロン
第2回万華鏡ワークショップ**

前回同様に病院界隈の参加者がサロンに集い、賑わいをみせた。

平成31年2月16日 まちなかサロン

金沢美術工芸大学生による「似顔絵をプレゼント。」

HAP初年度に行われた企画内容をサロンに転用した。アメリカ合衆国からの研究生が描く似顔絵が参加者には新鮮に映ったようで、大変好評であった。また学生の一人が描いた似顔絵がきっかけとなり、市民の方から肖像画を描いてほしいという依頼があるなど、学生と市民との間に美術表現をとおした地域交流が生まれている。

平成31年3月16日 まちなかサロン

**第1回ホスピタリティ・ドローイング ワークショップ
〈大きな落書きを描こう！〉**

サロン内の壁一面を覆う大きな紙に、地域住民が会場に用意された様々な画材を手思い思いのドローイングを行い完成。そのまま壁面に掲示した。殺風景だった会場が、サロンにふさわしい明るい空間になった。

平成31年4月20日 まちなかサロン

**〈ステンドグラスをつくろう〉～すきな形を切り
とって貼るだけ～**

サロンの窓ガラスにステンドグラスワークショップのような装飾を施した。カラーセロファンよりも扱いやすく、シール仕立てで加工が容易な透明なカッティングシートに図柄を描き、それを切り抜いたものをガラス面に貼った。

**第26回 令和元年8月19日～21日
光の回廊シリーズ11〈月面旅行〉
ワークショップ・展示**

「月面旅行」と題し、夏の夜空に想いを馳せて月面旅行を夢見るイメージを描いた。過去に何度か候補に挙がっていたテーマが日の目を見た。

第27回 令和元年9月14日～16日

**第8回ホスピタルギャラリー 一病院が美術館になる日ー「安らぎのいろ かたち 味わい」
出品者・作品点数 166 観覧者 1,324名**

2020年

令和2年1月18日 まちなかサロン

第2回ホスピタリティ・ドローイング ワークショップ

前年度に行った企画の第2回。今回は縦182cm×横91cm×10cm厚の建築用材（スタイロフォーム）3枚、ジェツソで白く地塗りしたパネル仕立てのものを用意した。前回の大きな用紙1枚に描いた絵は鋏で止めて掲示してあったのだが、時間の経過とともに自らの重みで剥がれ落ちてしまっていたため、今回は3枚のパネルに描いたドローイングを受け金具で壁に固定して展示した。

2021年

第28回 令和3年3月6日～

第9回ホスピタルギャラリー

2019年末に始まった世界的規模の感染症拡大の影響により、例年の光の回廊シリーズとホスピタルギャラリーの2020年内の実施は困難となり中止になった。何らかの形でプロジェクトの活動を継続すること病院に呼びかけ、前年度ホスピタルギャラ

リー出品作の中から37点を選び、市立病院ホームページ上において「デジタル・ホスピタルギャラリー in Kanazawa」として第9回展を開催した。

2022年

第29回 令和4年3月～(予定)

第10回ホスピタルギャラリー

第10回展も前年度のように、感染症予防の観点からWEBサイト上でのデジタルギャラリーとして実施される予定である。本展では通常の展示に近い手続きで医療関係者や患者、市民から作品を募集する。

4. HAPの現状

四国こどもとおとなの医療センター(香川県善通寺市)ホスピタルアート・ディレクターの森 合音氏によれば、金沢市立病院と金沢美術工芸大学の連携による本プロジェクトは、大学・医療機関・行政の三者が一体となった幸せな協力関係が成立している全国的にも珍しい例である、という。金沢市には美大があり、市立病院と金沢美大の設置者が共通であるということから、本プロジェクトが成立する下地は揃っていたということであろう。それに加えてこれまでプロジェクトが継続できた要因として、金沢市および金沢市民の美術工芸の歴史を背景とした美術・芸術に対する理解の深さと、市立病院と大学の協力体制が挙げられる。そしてプロジェクトに臨む学生たちの真摯な姿勢と、制作にむかう際に発揮される造形力の高さに依るところが大きい。

プロジェクト開始間もない頃から、アートを病院や市民に提供することに留まらず、そのことによる教育効果について本学の美術教育の場において還元するべく、新規科目による単位化を図るなどの何かしらの対応が求められると感じていた。しかし手間のかかる下準備に勤しむ学生たちの様子を見てみると、自発的に部活やサークル活動を楽しんでいるかのようにも映る。それは筆者が企画の度に彼らと共に作業する中で感じていることでもあるが、自分たちが美大生活での学修で経験した知識や技術を駆使

して提案した「もの・こと」に触れた人々が、企画を楽しみその時間を生きている姿に素直な感動を覚えるのである。その感覚を一言で言うと「美術表現における新たな気付き」ということであろうか。学生スタッフは自分達が地域社会と関わる中で成し遂げたワークショップと仕上がった作品に、個人における自己完結型の作品制作とは異なる言葉に尽くせない達成感を味わう。この自然で純粋な感覚を授業における単位化という括りで縛ることが良いのか否か、未だ判断しかねているというのが筆者の個人的な思いである。

5. 課題と展望

HAPによって創出される「もの・こと」に新しい美術表現分野の可能性を見出し、その分野を表現活動の柱にしたいと考える学生が現れたとき、大学として学生に対してどのような方向性を提示できるのか。「もの・こと」の先にある「ひと」についても育成していくべきという方針を大学が打ち出していくのであれば、今後は学問としての医療とアートの関係性について学び研究する場として科目を開講し、単位化を図るなどの具体的な取組みが求められるであろうし、巣立った人材を受け入れる道筋についても働きかけていく必要がある。その実現のためには、その分野を新しい美術表現の研究対象としていく大学の方針を提示していく中で、学術的な側面でホスピタリティアートを含めた医学とアートの関係性についての理論の構築が必要になるであろう。

プロジェクトが始まって間もない頃、横川プロジェクト座長は筆者に「作品制作の成果を求め完結するというスタイルは、アートとしては新しいとはいえない。これからのアーティストはもっとひらかれた存在であるべき。」と、これからの美術表現のあり方を示唆した。そして「自分が作家であることを忘れてはいけない。作家としての視点を持つ人間がこれ(HAP)に関わっていることに意味がある。」とも。〈ひらかれた存在〉とはどういうことか。明確

な答えが見つからないままに絵画制作とプロジェクトの二本の道を並走した状態で現在に至るが、筆者がHAPに携わって数年が経ったある時、久世学長との会話の中でそのことが話題になった。久世先生は自らの両手を草鞋に見立て、「これがいつか一つになるんだよ。」と、少し笑みを湛えその両手を重ね合わせてみせた。当時の筆者の印象からすると作家然とした久世学長からそのような言葉が出たとき、学長の造形に対する眼差しの奥深さを再認識したと同時に、作家でありつつプロジェクトに関わっていく中で行き着く先の何かを示されたように思えた。

活動記録が蓄積していく一方で、それらを理論立てて取りまとめる作業までには至らない状況がある。HAP活動の記録と成果について、理論面で包括的な視点で整理し、共に研究を進めていく教員の存在が必要であると感じている。

6. 医療とアート

これまでのHAP活動をとおして、医療環境におけるアートを介したコミュニケーションの創出は、患者の孤独を癒し人間の社会性の回復に一定程度の効果をもたらすことが実証されていると感じる。少子高齢化や家族構成のあり方が変化していく中で、病気の治療や介護の現場において医療とアートの融合による美術表現の必要性は今後高まっていくことが予想され、人間の表現行為というものに新しい視点を見出す分野としてさらに注目されていくと考えられる。

病院の起源とされる中世ヨーロッパの修道院には、貧富の差に関係なく誰しものが治療を受けられる場としての役割があったことが知られている。その祈りの空間では穏やかなステンドグラスの光に包まれて集う人々の、静謐なコミュニケーションが創出されていたことだろう。HAPにおける患者、医療者、学生によるワークショップやホスピタルギャラリーでの市民の交流を見ていると、その当時の光景が鮮やかなイメージとなって眼前に立ち現れてくるように思える。医療とアートの良質な関係について

の可能性とは今に語られることではなく、元からそこにあったであろう「もの・こと・ひと」のすがたなのである。

7. まとめ

2019年末から世界的規模で蔓延した新型コロナウイルス感染症の影響により、HAPの例年の活動は中止を余儀無くされた。

「COVID-19」によって引き起こされた、あらゆる分野にわたるコミュニティの断絶や、大切なひとの人生の最期にも寄り添えない現実。一例であるが…新型コロナウイルス禍の最中に父危篤の報を受けるも、移動の際のウイルス感染を危惧する母からの意見を聞き入れ父のもとに向かうのを断念する。父が倒れた要因は基礎疾患に依るものであるが、コロナ感染者ではないにもかかわらず、搬送先の病院では患者の家族であっても面会は病室外の廊下まで。母は病院のルールに従い、透明ビニールで遮断された先にいる父を見守った。そのような状況下で人生の最期を迎える、夫を看取る思いは如何ばかりであったことだろう。

時折在りし日の父との記憶がよぎる中、筆者は改めて医療環境におけるホスピタリティの意味について考える。新型コロナ禍によってもたらされた平時ではあり得なかった状況に接し、医療環境におけるホスピタリティ（もてなし）空間創出の理念は、このような状況においてこそ重要な意味を孕んでいるのだという気づきがある。それがあたかも亡き父からのひそやかなメッセージであるかのように。

HAPの毎年蓄積していく記録の扱いについて、大学として適切な形で記録管理をしていく必要があると感じながらも、一教員としての記録保管に終わってしまいかねない現状に焦燥感を抱いていた。本稿では、筆者である三浦と岩崎が保持している資料をもとに2011年9月以降のプロジェクトの概要について本文を三浦が、記録の確認とHAP企画に関する見解を三浦と岩崎が担当した。これまでの活動に関す

多くの資料を保持しているとはいっても完全に網羅しているわけではなく、記述内容や画像資料等に幾らかの不足はあると自覚している。紀要の性質上、資料や記述内容については十分な準備を経て執筆に臨むべきではあるが、いつかプロジェクトの全容をまとめる必要性を迎えた際にさらに詳細な記録を引出す際の鍵となる役割を担う記録として、現段階でまとめ得る範囲について記した次第である。本稿が関係諸氏からのご指摘を受け、プロジェクト記録の精度を高めていく機会となれば幸いである。

謝辞

本稿執筆に際し、越原智弘氏（金沢市立病院担当事務）から関連資料データを、鏑 隆弘氏（金沢美術工芸大学環境デザイン専攻教授）から写真資料のご提供を賜りました。また、横川善正氏（金沢美術工芸大学名誉教授）には本稿に関して貴重なご助言を賜りました。

この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

註

- 1 『病院のアート』－医療現場の再生と未来－ 対談3「病院が育てる新しいアートとデザインとは？－ホスピタリティアート・プロジェクトから見えてきたもの－ 高田重男×横川善正」〈…ありふれた毎日のルーティーンからのちょっとしたはみ出し、気づきのマジック、それに尽きるんですよ。「マジック」と「メディスン」は同じ語源ですね、つまり「芸術」は「医術」でもあったわけです。〉〈…真の最先端の医術はアートであり、これを取り入れていかないと本当の医療先進国とはならないんじゃないか。高田先生もいつもこの話をされますが、「医療者の教育」と「患者の教育」の根底を貫くのが、アートの中に包摂される共鳴力、コミュニケーション力、創造力だということです。…〉

参考文献

横川善正「ホスピタリティアート・プロジェクト－活動と視座－」金沢美術工芸大学紀要No.56、pp. 21-31. 2012年

三浦賢治「ホスピタリティアート・プロジェクト－

ワークショップ・展示～金沢市立病院における実践から～－その1」金沢美術工芸大学紀要No.56、pp. 33-45. 2012年

三浦賢治「ホスピタリティアート・プロジェクト－ワークショップ・展示～金沢市立病院における実践から～－その2」金沢美術工芸大学紀要No.57、pp. 61-67. 2013年

『病院のアート－医療現場の再生と未来』
アートミーツケア学会 編・発行、森口ゆたか・山口（中上）悦子 責任編集、2014年

『ホスピタリティ・アートプロジェクト 病院を安らぎの空間に』 高田重男 横川善正 監修、新潮社、2017年

（みうら・けんじ 油画専攻／油画）

（いwasaki・じゅん 油画専攻／油画・アクリル画）

（2021年11月5日 受理）

参考： ホスピタリティアート・プロジェクト 2009 年～

整理 No.	実施日・期間	企画・場所	画像	担当教員・参加学生（専攻・学年は当時）
1	2009年 10月25日、 26日	ロビーを彩る光のアート/ステンドグラスワークショップ・展示 光の回廊シリーズ1 〈生命の樹〉 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治准教授 協力 青柳りさ教授 ○油画専攻3年 井上 俊 加茂那奈枝 佐藤美奈子 谷村祐美 中條美和子 湊 良太 浜崎恵利 福井美穂 森山理絵 山口 新 ○油画専攻4年 長屋さゆ美
2	12月24日 ～26日	ヒューマン・ドローイング「似顔絵をプレゼント。」 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治准教授 協力 青柳りさ教授 ○油画専攻1年 島 小織 竹政胡桃 野一色彩 森 千咲 ○油画専攻2年 山本愛子 ○油画専攻3年 森山理絵
3	2010年 2月18日、 19日	万華鏡ワークショップ 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治准教授 協力 青柳りさ教授 ○油画専攻2年 渡邊里美 ○油画専攻3年 井上 俊 加茂那奈枝 佐藤美奈子 出村美奈 浜崎恵利 湊 良太 山口 新 ○日本画専攻3年 高橋克典
4	7月13日	コウゲイ・セラピー 「粘土を使ったワークショップ：私だけの湯飲み」 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 山本健史准教授 ○工芸科3年 片石憂衣 谷沢みな美 渡邊暁奈
5	7月26日 ～8月6日	「ユーモアは心の点滴」ホスピタリティ・デザイン展 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 後藤 徹教授 ○視覚デザイン専攻3年 荒木あゆみ 案浦美美 井上信也 井上雅裕 伊吹志帆 岩上千春 菊池佳奈 北村華苗 上坂和摩 小林萌枝 志知希美 白木久美子 末藤智菜 鈴木春香 瀧上ちひろ 服部貴史 宮沼良貴 矢田朋美 矢淵隆優
6	8月26日、 27日	光の回廊シリーズ2 〈夢の水族館〉 ワークショップ・展示 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治准教授 協力 青柳りさ教授 ○油画専攻1年 竹内佑未 ○油画専攻2年 島 小織 竹政胡桃 徳山貞幸 野一色彩 長谷川愛 三浦 萌 森 千咲 ○油画専攻4年 井上 俊 佐藤美奈子 谷村祐美 中條美和子 出村美奈 浜崎恵利 森山理絵

7	11月3日 ～現在	プロジェクト記録 病院内常 設展示 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治准教授
8	2011年 8月29日、 30日	光の回廊シリーズ3 〈オアシス〉 ワークショップ・展示 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治准教授 協力 青柳りさ教授 ○油画専攻1年 大田 香 小林大地 早川 桜 濱出ひかり 早川 璃 福井伶奈 米 田 雅 ○油画専攻2年 竹内佑未 竹政胡桃 ○油画専攻3年 島 小織 徳山貞幸 野一色彩 長谷川愛 森 千咲 ○修士課程絵画専攻油画コース1年 浜崎恵利 湊 良太 森山理絵
9	9月22日 ～10月7日	待ち時間を豊かにする椅子 (ホスピタリティ・チェア ーズ) 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 根来貴成講師 ○製品デザイン専攻3年 明比里実 東 珠里 荒金明道 石津雄登 伊藤幸花 今村勇斗 大津寄信二 大屋里絵 岡 菜々子 島 葵 角田和也 田井晴馨 西 悠也 西野雅弘 林田怜詩 細川扶美 松浦泰明 村上沙穂
10	11月8日 ～12月2日	病院の水回り空間創生プロジ ェクト 動作検証モデル展示 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 荒井利春教授 ○製品デザイン専攻3年 明比里美 島 葵 田井晴馨 西 悠也 ○環境デザイン専攻3年 森山由子 ○修士課程デザイン専攻1年 今村有希
11	2012年 2月3日～ 10日	病院を元気にするデザイン展 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 後藤 徹教授 寺井剛敏教授 ○視覚デザイン専攻2年生
12	8月4日、5 日	第1回ホスピタルギャラリー -病院が美術館になる日-「安 らぎのいる かたち 味わい」 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治准教授

13	9月2日～4日	光の回廊シリーズ4 〈パレード〉 ワークショップ・展示 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治准教授 協力 青柳りさ教授 ○油画専攻2年 大田 香 小林大地 早川 桜 濱出ひかり 早川 璃 福井伶奈 山本翔平 米田 雅 ○油画専攻3年 工藤真味子 ○油画専攻4年 島 小織 徳山貞幸 野一色彩 長谷川愛 森 千咲 ○修士課程絵画専攻油画コース2年 浜崎恵利 湊 良太 森山理絵
14	9月28日 ～10月12日	待ち時間を豊かにする椅子II 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 根来貴成講師 ○製品デザイン専攻3年生23名
15	11月9日 ～22日	ランドスケープ・デザイン展 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 鏑 隆弘教授 ○環境デザイン専攻3年生
16	2013年 4月26日 ～5月6日	待ち時間を豊かにする椅子III Hospitality Chairs 待ち時間を豊かにする椅子、特別企画展 “家具の音楽 musque d`ameublement” 石川県立音楽堂		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 根来貴成講師 ○製品デザイン専攻3年生
17	5月11日	市立病院5階西病棟水回り 空間改修完成記念会 金沢市立病院		荒井利春名誉教授 講演「在宅生活につながる病院の水回りを目指して」—全員参加の水回り改修デザインプロジェクト—
18	9月2日～3日	光の回廊シリーズ5 〈夏の想い〉 ワークショップ・展示 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治教授 協力 青柳りさ教授 ○油画専攻1年 大出久美子 大野三結 鷹合友衣 谷本 梢 中島大河 永井ちなみ 野木麻美 ○油画専攻2年 山本武明 ○油画専攻3年 大田 香 小林大地 濱出ひかり 早川 桜 福井伶奈 山本翔平 米田貴雅 ○修士課程絵画専攻油画コース1年 島 沙織 中川暁文 野一色彩 ○修士課程絵画専攻油画コース2年 加茂那奈枝

19	9月21日 ～23日	第2回ホスピタルギャラリー -病院が美術館になる日-「安 らぎのいる かたち 味わい」 金沢市立病院		プロジェクト座長 横川善正教授 監修 三浦賢治教授
20	2014年 8月25日～ 26日	光の回廊シリーズ6 〈南からの風〉 ワークショップ・展示 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 青柳りさ教授 岩崎 純油画専攻非常勤 講師 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授 ○油画専攻1年 坪井 一 藤原保奈美 古中雄二 星原健人 宮崎竜成 ○油画専攻2年 大野三結 中島大河 永井ちなみ 野木麻美 山本武明 ○油画専攻4年 大田 香 小林大地 濱出ひかり 早川 桜 福井伶奈 山川莉穂 山本翔平 米田貫雅 ○修士課程絵画専攻油画コース2年 島 沙織 野一色彩 ○博士後期課程美術工芸専攻油画1年 加茂那奈枝
21	9月13日 ～15日	第3回ホスピタルギャラリー -病院が美術館になる日-「安 らぎのいる かたち 味わい」 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純油画専攻非常勤講師 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授
22	2015年 8月23日 ～25日	光の回廊シリーズ7 〈夢の発掘〉 ワークショップ・展示 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授 ○油画専攻1年 岩城佳那子 佐藤晴菜 棚部 芹 筒井愛子 角田優美 升沢春奈 四本優南 ○油画専攻2年 岩岡朝日 坪井 一 藤原保奈美 古中雄二 星原健人 宮崎竜成 山岸耕輔 ○油画専攻3年 大野三結 佐藤李香 野木麻美 ○日本画専攻3年 河原万生子 ○油画専攻4年 山本武明 ○修士課程絵画専攻油画コース1年 池上竹途 楓 大海 千川岳志 米田貫雅 ○修士課程ファッションデザイン専攻1年 大田 香 ○博士後期課程2年 加茂 那奈枝 ○ナンシー・ロレーヌ大学3年 マリー・ドスタ

23	10月10日 ～12日	第4回ホスピタルギャラリー -病院が美術館になる日-「安らぎのいる かたち 味わい」 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授
24	2016年 8月21日 ～23日	光の回廊シリーズ8 〈夏の冒険〉 ワークショップ・展示 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授 ○油画専攻1年 秋山雅貴 伊木さなえ 伊藤万里子 伊藤真里奈 木須菜々美 高橋初音 立山華保 塚原由子 中村清夏 松川祐実 山崎涼太郎 ○油画専攻2年 今江 綾子 棚部 芹 塚田華都緋 角田優美 升沢春奈 四本優南 ○油画専攻3年 坪井 一 平山 森 藤原保奈美 古中雄二 星原健人 宮崎竜成 山岸耕輔 ○油画専攻4年 大野三結 野木麻美 ○日本画専攻4年 河原万生子 ○修士課程絵画専攻油画コース1年 山本武明 ○修士課程絵画専攻油画コース2年 米田貫雅 ○フランス・ナンシー市ロレーヌ大学 Loic MEISSE Becker ANAIS
25	9月17日 ～19日	第5回ホスピタルギャラリー -病院が美術館になる日-「安らぎのいる かたち 味わい」 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授
26	2017年 8月20日 ～22日	光の回廊シリーズ9 〈くまさんの夏休み〉 ワークショップ・展示 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授 ○油画専攻1年 石田彩夏 犬飼好美 合田果帆 小佐井あかね 遠矢実樹 山田美智子 渡邊春佳 ○日本画専攻1年 沖館佳奈 中井詩織 ○油画専攻2年 秋山雅貴 伊藤真里奈 塚原由子 南 唯乃 ○油画専攻3年 棚部 芹 塚田華都緋 角田優美 升沢春奈 四本優南 ○油画専攻4年 平山 森 古中雄二 ○修士課程絵画専攻油画コース2年 山本武明 ○フランス・ナンシー市インターンシップ生 ヴィルジニー・シュルツ アメリー・ティスラン

27	9月16日 ～18日	第6回ホスピタルギャラリー -病院が美術館になる日-「安 らぎのいる かたち 味わい」 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授
28	2018年 8月19日 ～21日	光の回廊シリーズ10 〈四季のかがやき〉 ワークショップ・作品展示 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授 ○油画専攻2年 石田彩夏 犬飼好美 橋本由衣 山田美智子 ○日本画専攻2年 沖館佳奈 ○油画専攻3年 秋山雅貴 伊藤真里奈 塚原由子 南 唯乃 ○油画専攻4年 棚部 芹 塚田華都緋 仁木このみ ○芸術学専攻4年 宮下沙友理 ○修士課程絵画専攻油画コース1年 古中雄二 ○博士後期課程油画1年 内田望美 ○博士後期課程油画2年 米田貫雅 ○フランス・ナンシー市インターンシップ生 小倉はなえ ポール・ヴァン・ヴェンデル
29	9月15日 ～17日	第7回ホスピタルギャラリー -病院が美術館になる日-「安 らぎのいる かたち 味わい」 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授
30	9月17日	まちなかサロン プレオープ ン企画 金沢市立病院健康講座「フレ イル(体の老化)を予防して元 気に生きよう」 金沢市平和町・アルコ1F		講師：高田重男 金沢市立病院長
31	12月22日	まちなかサロン 万華鏡ワークショップ 金沢市平和町・アルコ1F		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授
32	2019年 1月26日	まちなかサロン 第2回万華鏡ワークショップ 金沢市平和町・アルコ1F		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授

33	2月16日	まちなかサロン 金沢美術工芸大学生による 「似顔絵をプレゼント。」 金沢市平和町・アルコ1F		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授
34	3月16日	まちなかサロン 「ホスピタリティ・ドローイング」ワークショップ 金沢市平和町・アルコ1F		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授
35	4月20日	まちなかサロン 「ステンドグラスをつくろう ～すきな形を切りとって貼る だけ～」 金沢市平和町・アルコ1F		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授
36	8月19日 ～21日	光の回廊シリーズ11 〈月面旅行〉 ワークショップ・展示 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授 ○油画専攻1年 青山啓佑 高山桃歌 米田麻衣 ○日本画専攻1年 麦谷真緒 ○芸術学専攻1年 伊藤聡美 伴 彩寧 藤田真央 安野花菜 ○油画専攻3年 石田彩夏 犬飼好美 小佐井あかね 合田果帆 遠矢実樹 橋本由衣 山田美智子 ○日本画専攻2年 沖館佳奈 ○油画専攻4年 伊藤真里奈 塚原由子 南 唯乃 ○修士課程絵画専攻油画コース1年 棚部 芹 四本優南
37	9月14日 ～16日	第8回ホスピタルギャラリー -病院が美術館になる日- 「安らぎのいる かたち 味わい」 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授 プロジェクト顧問 横川善正名誉教授

38	2020年 1月18日	第2回「ホスピタリティ・ドローイング」ワークショップ 金沢市立病院		監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授
40	2021年 3月6日～	第9回ホスピタルギャラリー 金沢市立病院	金沢市立病院 HP	監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授
41	2022年 3月～	第10回ホスピタルギャラリー （予定） 金沢市立病院	金沢市立病院 HP	監修 三浦賢治教授 協力 岩崎 純准教授

